

## 報告

# フランスとアーキビストの200年 —オリヴィエ・ポンセ教授の講演を拝聴して—

A participation Report about the Conference held by professor Olivier Poncet: “200 years of France and archivists”

五十嵐 和也

Kazuya Igarashi

2019年12月7日、学習院大学大学院アーカイブズ学専攻の主催のもと、同校にてフランス国立文書学校のオリヴィエ・ポンセ教授による講演会「フランスにおけるアーキビスト養成（過去、現在、未来）：学問的、社会的および政治的課題」が開催された。講演を拝聴した立場から、その参加記として本稿を記したい。

さて、フランスにおけるアーカイブズ学教育、アーキビスト養成の体制の充実と歴史の長さは、歴史学やアーカイブズ学を学ぶ者の多くが知るところだろう。その体制の中核とも言えるのが、オリヴィエ・ポンセ教授が教鞭を執られるEcole nationale des chartes（国立文書学校）である。なお、同校の和訳には国立古文書学校や国立古文書学院などの多数の和訳が存在するが、本稿では講演に従い、以下、「国立文書学校」とする。

国立文書学校は1821年、王政復古による第二王政の時代に勅令によって設立された学校であり、専門知識を持つ官僚やテクノクラートを養成する高等教育機関“グランド・ゼコール”の一つである。1821年から現在まで、その歩んだ歳月は200年にも及ぶ。歴史の波のなかでアーキビストに求められる役割、取り巻く環境、あるいは扱う資料そのものが常に変化していったのは言うまでもない。その波のなかで、国立文書学校は常に時代に適応するため模索し続けてきた。

本講演では、この国立文書学校が歩んできた歴史＝過去、そして今置かれている現在、来るべき未来のそれぞれに焦点を当て、アーキビストを育成する営み、またアーキビストに求められている役割について詳しく御紹介いただいた。

まず、オリヴィエ・ポンセ教授はアーキビストの職務が古典的には「収集する（collecter）」、「分類する（classer）」、「保存する（conserver）」、「公開する（communiquer）」という4つのCから始まる動詞で表されるとした上で、19世紀—すなわち国立文書学校の濫觴期であり、学校自体も、また国家そのものも幾多の変化を経ながら発展していった時代—を「分類の時代」と表現した。では、なぜ「分類」の時代なのだろうか。それは当時のフランスが置かれていた状況、すなわち革命に起因する。1820～30年代のアーキビストの役割は、それを公開し、行政や個人と資料の間に立つ「媒介者」となることであり、求められるのは「きちんと資料を読めること」であった。国立文書学校が設立されたのもそ

のような時代の下であり、学生にも史料刊行事業に寄与することが求められていた。しかしながら、革命の結果としてアーキビストのもとには大量の資料が押し寄せることとなった。それを整理するには、単なる「媒介者」としての役割だけでは不十分となったのである。そこで求められることになったのが、大量の古文書を「分類する」役割であった。

「分類する」役割、すなわち、整理・分類・記述を行い目録の刊行という形で成果を出し、歴史学の領域に寄与することが求められたのである。実際にそれを表すように、国立文書学校においてフランス史資料講座の教授を勤めたシメオン・リュースは「文書学校は、歴史学の領域において、理工科学校やその他の特殊応用学校が数学領域で果たしている役割を担っている」と述べている。

19世紀後半の第三共和政の時代になると、国立文書学校は行政学院や理工科学校とともに専門職公務員の養成をミッションとした国立専門学校の一つとなり、アーカイブズ管理専門職の養成機関としての地位が確立されていった。しかしながら、この19世紀後半という時代は、アーキビストが歴史家だけに向きあっていたれば良い時代の終わりでもあった。19世紀末、そして20世紀に入ると、行政現用文書の管理という新たな役割がアーキビストに突き付けられたのである。換言すれば、資料が生み出され、現に利用される場面へのコミット（＝行政側とのコミット）という新たな局面への対応が行政から求められたのである。

この局面を象徴するように、1904～05年にかけてフランス国会ではアーキビスト養成体制の再構築が議論された。その内容は、より「管理」「運営」に教育内容の重点を置くべきではないか、というものであった。実務・職業面の重点化である。しかし国立文書学校は、職業的であると同時に学術的である教育を行うという理念を固持し、その理念を守り抜いた。

とはいえ、実務・職業面の重視が社会的要請となっていることは、従来の教育から新たな教育への移行が必要であることを意味していた。20世紀という時代は、アーキビストにとって変革の時代だったのである。事実、戦間期にいたるとまず1924年に地方都市のアーカイブズ資料を県文書館に移管できるようにする政令が制定され、さらに1928年には公証人文書の公的文書館への移管が認められた。そして1936年には国から国家文書館への移管の方法が改められ、アーキビストがより資料を生み出す側に近い場所に関与することになった。これだけにとどまらず、1938年には家文書や企業文書などの私文書も国が保護する対象となり、国の文書館は従来の行政文書にとどまらず私的なアーカイブズも保護することとなったのである。この数十年間での目まぐるしい制度的変化に、国立文書学校はどのように対応したのであろうか。

動いたのは行政当局側であった。1949年、フランス・アーカイブズ総局は国立文書学校卒業生がより直接的に実務に対応できるよう、現場での研修制度を創設したのである。研修の責任者を務めたアルベール・ミロはアーキビストの養成を3段階に分け、文書学校入学前（＝試験時）に全般的な知識を獲得する段階を第1段階、入学後に学び、方法論や学問的精神を身に着ける段階を第2段階、そして多種多様なアーカイブズに対応するため補

完的教育を受ける段階を第3段階と説明した。文書館研修がこの第3段階にあたるというわけである。この研修は、各国の機関からも参加者が集まる「国際研修」としての性格も有していた。

このような動きがみられた1950年代以降は、いわゆる文書のライフサイクル論などが主張され、受容されるようになっていった時代でもあった。先のアルベール・ミロはこれを「暑い」「ぬるい」「冷たい」(＝現用・半現用・非現用)と表現したが、文書を時間的・機能的に分節化するこの試みはフランスで経験則として知られていたことを理論化することに繋がった。フランスでは1952年段階から、既にアーキビストが資料の生成段階から関与する「事前アーカイブズ化」が試みられていたのである。もちろん、国立文書学校の教育はカリキュラムで扱っていなかったこのような状況にも対処し得る専門性を身に付けられるものであった。しかしながら、1957年には伝統的に中世史に重点が置かれてきたカリキュラムに1789年以降の時期も取り入れられるようになったという事実は、フランスのアーカイブズ制度の変容が養成制度にも影響を及ぼしたことを物語っているだろう。

さらに1977年には国立文書学校のカリキュラムに大きな改革が行われた。従来のテーマ別から、時代別(中世・近世・現代)へと変更されたのである。諸制度→文書学→アーカイブズ学という一連の流れを各時代的特質を踏まえたうえで分節化する取り組みは、これまで「中世」中心であった国立文書学校において「現代」の理論的基礎研究を確立することに繋がり、現代をテーマとする学生の増加にも繋がったという。

以上のように、19世紀末から20世紀初頭における行政的要請、戦間期におけるアーキビストの収集対象資料の拡大、戦後における資料生成段階への関与の開始など、アーキビスト、そして国立文書学校にとって様々な変化があった20世紀という時代を、オリヴィエ・ポンセ教授は「収集の時代」と表現された。そして次に語られたのが現在＝「共有の時代」であった。

フランスでは1983、84年から地方分権化が進み、この結果として県や都市、日本的に言えば地方自治体においても専門職としてのアーキビストの必要性が生じたのである。求められるアーキビストの数が増えるということは、同時に国立文書学校卒業生(シャルティスト)だけでは国家全体をカバーしきれないことを意味していた。この新たなアーキビスト需要に応えるため対応したのは大学であった。1976年にオート＝アルザス大学が都市アーキビスト養成のための学位を創設したのを嚆矢として、各大学において公的・私的機関のアーキビストを養成するための過程が設けられるようになり、現在ではその数は12に上るという。需要の増加が、教育の拡大に繋がったのである。

各大学にアーキビスト養成講座が創出されるという新たな動きとともに、国において、それとは別に国立文書学校にとって大きな影響を及ぼす出来事があった。それは、1990年の国立文化遺産学校の設立である。国立文化遺産学校(2001年に国立文化遺産機構となったため、以下「文化遺産機構」とする)は大学学位取得者を対象として文化遺産の管理を行う専門職公務員を養成するための機関であり、それは国立文書学校卒業生でも試験を受けなければ入れないものであった。そして、この国立文化遺産機構アーカイブズ領域は国

際研修が果たしていた役割を継承するものでもあった。

この国立文化遺産機構創設の動きはアーキビストの養成制度の再編だけでなく、アーキビストのあり方の再定義をも志向するものであった。すなわち、「アーキビスト」(＝アーカイブズ管理者)を、より広い範囲をカバーする「文化遺産保存官」に置き換えようという動きである。

文化遺産機構の出現は長らく国立文書学校がフランスのアーカイブズの世界において築いてきた独占的・特権的な地位を終わりに導くものであったが、一方で教育に深化をもたらすものでもあった。それは、実践研修の拡大である。2013年には、国立文書学校において実践研修を1年間の就学期間延長という形で制度化するに至っている。広い分野での基礎教育(国立文書学校の伝統的教育)と、実践的な研修が両輪となり、それぞれが相互補完するような養成体制が構築されたのである。

さて、オリヴィエ・ボンセ教授が現在を「共有の時代」と表現されたという話に戻ろう。それまでアーカイブズは「国家」の問題であったが、地方分権の波のなかで県や都市などにも広がり、それが社会的要請となって各大学にもアーカイブズ学が広がっていったのである。今では大学をも越え、インターネット世界においてもアーカイブズ学教育が展開されている。それが、アーカイブズ学のオンライン教育として提供されている「PIAF」である。PIAFはフランス語圏アーカイブズ学国際ポータルを通じて公開されており、インターネットを通じ、居ながらにして165時間に渡るアーカイブズ学の全般的・技術的な学びを得ることができるのである。

国家のみの問題が地方へ共有され、国立文書学校のみであったアーカイブズ学教育が様々な大学へ共有されるという、まさにフランスという国全体でアーカイブズ(学)が共有されるに至った時代が「現在」という時代なのである。

過去、現在と見てきて、最後に紹介されたのは「未来」であった。「未来」というと大きな印象を受けるが、アーカイブズの世界において未来は着実に現在に忍び寄っている。それは、情報化や電子化といったデジタル化の波である。本稿を記している筆者も行政に勤務する身であるが、公文書や様々な手続きの電子化・デジタル化が確実に、加速度的に進行していることを日々実感している(本稿を記している今日も、とある市民向け手続きを完全電子化するための実証実験が始められたとのニュースが県内版NHKで放映されていた)。何もこれは筆者のみが感じるのではなく、行政に携わる数多の人間が感じているところであろう。

この電子環境・デジタル環境の整備に伴って作成される文書量は爆発的に増大している。未曾有の環境の中で、アーキビストは資料を将来に引き渡すためにどうすれば良いのだろうか。オリヴィエ・ボンセ教授によれば、それは「アーカイブズ生産の鎖の非常に早い段階に介入」することだという。具体的には資料の最上流、すなわち作成段階で処理を決めておくというやり方である。破棄が一般化され、アーカイブズとしての保存が例外となるであろう電子環境のなかで、アーキビストは「例外」を決定し、その正当性を示さなければならないのである。そのためには、最上流(作成段階)から最下流(アーカイブズとし



ての保存)まで、その全体を包括して見渡すことができる視点、爆発的に資料が増大するなか、それを生み出す組織・手続きについての幅広い知見が必要となる。このように記すと途方もない、スーパーマンでもなければ対応できないような事態に見えるかもしれないが、これに対応し得る力のバックボーンとなるのが歴史学研究・歴史的素養なのである。歴史的な諸制度を通じ文書を分析し、その形式や真正性、信頼性、正確性を確定させていく、国立文書学校で長い伝統を持つ文書学は、この来るべき(既に来ているが)電子環境において確かな道しるべとなるだろう。

あらゆる技術が「一瞬のうちに」浮かんでは消えていく電子という環境のなかで、「永久に」残すべきアーカイブズを選択し、管理していくことがアーキビストの役割の一つとなりつつある。紙からデジタルへという環境の変化は、逆説的に、アーキビストにおける歴史的素養の重要性を私たちに再認識させているのである。

以上、ここまでオリヴィエ・ボンセ教授の講演の概略を紹介してきた。講演は国立文書学校が創設された19世紀から今我々が生きる21世紀まで、およそ2世紀の時を貫く非常に長大かつ緻密で示唆に富んだものであった。まさしくアーキビストに必要な「長期的な視野」によるものだと言えるだろう。

国立文書学校の存在は知ってはいたものの、詳細については学ぶことを怠っていたため、筆者は恥ずかしながら本講演で初めて国立文書学校の歴史および体制を学んだ。常に時代の波と格闘し続けたその歴史は、我々に今の時代状況とどのように向き合うべきかを示唆するものでもあるだろう。また、鶏と卵の話ではないが、養成機関である国立文書学校が逆にフランスのアーカイブズ制度を「養成」してきたように感じられた点は非常に興味深かった。フランスのアーカイブズ養成制度と日本の現状を単純比較するのは早計であるが、歴史・現在において何が異なり、何が共通しているのか、そして未来に向けてどのような課題をそれぞれ有しているのかを認識し、今後のアーカイブズ制度に向けて我々は何をしていくべきなのか議論していくことが重要であろう。

末筆ながら、今回深い学びを得る機会を与えてくださったオリヴィエ・ボンセ教授ならびに翻訳・通訳を行ってくださった岡崎敦教授に深く感謝申し上げたい。